

# 学校衛生史研究の可能性

## —— フランス第三共和政期の初等教育を中心として

犬飼 崇人

### 論文要旨

学校衛生をタイトルに掲げた研究は、いずれも概観にとどまっており、系統だった言説分析、具体的な制度や実践の検討を欠いている。そこで本稿では、フランスの第三共和政期における初等教育を中心として、公衆衛生史、教育史、福祉史の観点で学校衛生に関連する諸研究を整理し、学校衛生史研究が持つ可能性を展望する。

公衆衛生史においては私的所有への介入が焦点とされて学校衛生が注目されてこなかった。このため、学校衛生をめぐる衛生当局の業務を分析することで、公衆衛生行政の役割について再評価が必要となる。その際、規律化や社会的統制の側面だけでなく、政府や専門家と社会との相互作用を注視すべきである。

また、医療と教育が交差する学校衛生の分析には貧困との関連も考慮すべきである。フランスの場合、公的扶助と公衆衛生をコミューンが主に担っており、学校と子どもに対する医療的な関心が強かった。そのため、学校を教育機関としてだけでなく、福祉と医療サービスの提供拠点としても考える必要がある。

キーワード【学校衛生、公衆衛生史、教育史、福祉史、フランス】

### はじめに

2019年末に確認された新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、瞬く間に世界中に拡大した。日本では、2020年初頭に国内での最初の感染者が発見されたあと、政府が同年3月から全国の小中学校と高校、特別支援学校に臨時休校を要請、多くの学校がこれに基づき休校措置を取った。この措置に対して、一人親、共働き家庭、非正規雇用従事者などさまざまな事情により苦境に立たされる家庭もあった。すなわち、子どもを学校に預けられないと生活が回らないこと、いいかえれば学校が持つ託児所としての機能が前面に押しだされたのである。感染症拡大の抑制と託児所としての機能、これらはいずれも近代以降の学校の本質にかかわるものと考えられる。

近代的な学校教育制度の確立期は、伝染病が世界中で多くの死者を出していた時代にあっていた。通学を無償かつ義務として日中のあいだ子どもたちを学校に集めることは、衛

生という観点から学校を捉えた場合にジレンマが存在した。すなわち、学校は衛生に関する知識の普及の場、子どもたちが望ましい衛生習慣を形成することへの期待がかけられた場である一方、子どもたちが集団で閉鎖的な空間に存在することによる病気の感染のリスクをとまなう場であり、非衛生的な環境であればむしろそこで病気を発症させたり悪化させたりしてしまう場でもあった。工業化・都市化にとまなう貧困および居住環境の劣悪化という時代背景のなかで、学校をいかに衛生的なものとするか、そしてできれば子どもの健康を向上させるための場とするかが問われることとなった。そのなかで、児童の衛生や不健康が貧困と分かちがたいことが意識されるようにもなった<sup>1)</sup>。

にもかかわらず、学校衛生と児童の健康の歴史に関する研究の蓄積はかならずしも多くない。学校衛生をタイトルに掲げた研究は存在するが、いずれも概観にとどまっており、系統だった言説分析、具体的な制度や実践の検討を欠いている。だが、関連する領域は多岐にわたる。そこで本稿では、フランスの第三共和政期における初等教育を中心として、学校衛生に関連する諸研究の現状を公衆衛生史、教育史、福祉史の観点で整理したうえで、学校衛生史研究が持つ可能性を展望したい。

## 1. 公衆衛生史の観点

そもそも人文社会科学的研究において近代化と身体を結びつけて考えることは 1970 年代から本格化したといえよう。五月革命に象徴されるように、近代的な価値観に対する疑義が呈される思想潮流にあって<sup>2)</sup>、歴史学が身体に関心を持つようになったのは社会学者や哲学者の投げかけた問いに端を発している。イリッチは「生活の医療化」が人々や社会に病のレッテルを貼り、人間の病や死への自律的な態度を喪失させているとして、医学や医療の持つ権力性に対して疑問を突きつけた<sup>3)</sup>。フーコーは、彼が古典主義時代と呼ぶ 17 世紀末からフランス革命までの時期において、身体は権力の対象ならびに標的となり、「身体の運用への綿密な取締まりを可能にし、体力の恒常的な束縛をゆるぎないものとし、体力に従順 = 効用の関係を強制するこうした方法こそ、《規律・訓練 discipline》と名づけるものである」としたうえで、規律・訓練を、「起源のさまざまな、出所もばらばらの、しばしば些細な過程の多種多様な集まり」であると述べ、たとえば監獄、学校、病院、軍隊、工場などにおける個々の技術の総体として位置づけた<sup>4)</sup>。

こうした問題提起に刺激された身体に関する歴史研究は、身体が社会的な存在であることをふまえ、身体的プラティーク〔実践〕をめぐる観念を歴史的に捉えようとした。特に 1980 年代以降にそうした研究が発展し、テーマも多様化した<sup>5)</sup>。たとえば、フーコーの影響を強く受けたヴィガレロは、清潔は文明化の過程を反映したものであり、身体のイメージ、感性、規範は相互に作用して変化していくことを長い歴史のスパンで明らかにした<sup>6)</sup>。また、

1880年代以降について、パストゥールに代表される細菌学の発展が人々の清潔さに対する認識を転換させたことを指摘した<sup>7)</sup>。しかし、それらの研究は、制度を無視したわけではなかったものの観念の歴史に偏りがちであり、また、いかに医療が社会に普及したかという一方向の医療化（*médicalisation*）の歴史にとどまっていた。

そこで1990年代になると、フランスにおいてはコミューン行政史研究の進展とともに、医療、公衆衛生に関する政治や行政の分析が進められた。ミュラールとジルベルマンによる共同研究は、公衆衛生の具体的な問題に直面した公権力の対応に迫った。彼らによれば、自由主義かつ中央集権型のイギリス、医学に基づく国家介入をおこなったドイツに比べて、フランスの国家権力が公的領域でのプレゼンスが弱く、その代わりにコミューンが欠落を埋めることとなったが、ローカルのエリート層は衛生の専門家の介入に対して反発し、市長は選挙を考えて行動できず、衛生学者には権限がなかったという構図を提示した。中央政府の一部の革新的政治家や衛生学者に対し、総じて公衆衛生における公権力、とりわけコミューン権力の実行力の欠如を主張したのである<sup>8)</sup>。これに対して、リヨンの衛生行政を事例として取りあげ、コミューンの衛生当局が有効に機能したと反論を加えたのが、デュモンとボレによる地方行政の研究であった<sup>9)</sup>。ここでは、衛生事務所長の報酬、専門性とも確保され、衛生事務所（*bureau municipal d'hygiène*）のスタッフや予算も十分なものであって、衛生行政はコミューンにおける急進党の権力に支えられて機能したと主張し、ミュラールとジルベルマンの見方は地域的な差異を認めないのもであると反論した。コミューン当局の活動を概観したジョアナによる論文も、デュモンとボレの研究を踏まえながら保守的な地元名士と革新的な専門家の対立という図式を批判し、公的扶助の領域と合わせてコミューンのエリート層の協力がありえたこと、それゆえに持ちえた革新性を指摘した<sup>10)</sup>。このように、公衆衛生におけるコミューンの主導性を評価する潮流が主流になりつつあるが、ブルドゥレとフィジャルコウはそれを認めつつも、衛生事務所が市庁舎のヒエラルキーになく、市長の協力ができないために衛生事務所長は力を発揮できなかったことや、1902年の公衆衛生法についても結局のところ地元エリート層の抵抗の存在を無視できないものとしてニュアンスを付けており<sup>11)</sup>、この問題に関しては決着を見ていないといえよう。

日本では、パリの住環境をめぐる衛生や結核問題を中心とした大森弘喜の浩瀚な研究がある。フランスにおいて不衛生住宅問題の解決などの衛生改革は微温的にならざるをえなかったこと、その理由は大革命の原理たる私的所有権の盤石さにあることがあげられた<sup>12)</sup>。首都パリを事例としているために他都市と同様に論じることは難しいが、既述のミュラールとジルベルマンと同様に公権力の無力さを強調する結論となっている。

公衆衛生行政をめぐる論点となったのはコミューン当局の実行力であった。ミュラールとジルベルマン、および大森の研究では不衛生住宅へのアプローチが問題となるため、学校衛生のような私的所有の問題にぶつからない領域における衛生当局の関与は抜けおちてしま

う。また、デュモンとポレの立場にも問題点がないわけではない。というのは、彼らの研究において主張の根拠となるのは、衛生事務所という機構の予算なり構成であり、衛生事務所長の専門性や給与であり、コミューン行政との距離といった制度的な枠組みであって、衛生事務所の個々の業務がどのように展開したのかを追っていないからである。二つの立場のいずれについても、学校衛生という領域におけるコミューン当局および衛生当局の行動を分析する必要がある。学校衛生についての研究が公衆衛生行政を深化させる可能性はここにある。

また、こうした行政を中心とした公衆衛生史に対して、ブルドゥレとフォールが編者となった論文集は社会史からのアプローチである。これまでの医療や衛生に関する社会史が具体的な実践や物質的な条件に無自覚であったことを批判して、新しいモノやふるまいの広がり、実践を媒介するアクター、諸制度などのダイナミズムを意識した内容構成となっている。健康をめぐる実践の変化を社会の変化や政治的コンテクストに位置づけることで、「征服的医療化 (médicalisation- conquête)」から「交渉された医療化 (médicalisation négociée)」へという捉え方の転換、あるいはそれを「医療文化の変化」として把握する姿勢をとる。すなわち、医療化の進展は、為政者や専門家による一方的な「征服」の過程ではなく、彼らと社会の側とのあいだの相互作用によって生じると捉えるのである。たとえば、社会における優先順位の変更にともなって医学的な側面が後退することもありえたこと、あるいは新しい実践のブレーキ役とみなされがちな教会でも下位の聖職者は人々の近くにある立場上、病院が死ぬための場所ではなく回復のための場所であることを説くなど、対立のみに還元できない妥協あるいは協調を視野に入れている<sup>13)</sup>。

フーコーの影響を受けた身体史では公衆衛生の役割を社会的統制の問題として論じる傾向があった。古くはシュヴァリエの研究からも明らかなように、エリート層からは犯罪と貧困と不衛生がセットで捉えられており、そうした認識はぬぐい去りがたく存在したことは確かであろう<sup>14)</sup>。しかしながら、第三共和政期、それも第一次世界大戦を経たあとの時期においてもそうした問題設定は妥当であろうか。19世紀末からの社会的扶助の拡大、連帯主義の登場によって、衛生や学校が社会において持つ意味も変化したのではないだろうか。その点を考慮するならば、ブルドゥレとフォールが掲げたように社会の側のリアクションを視野に入れる必要がある。

## 2. 教育史の観点

次に教育史におけるアプローチをまとめておきたい。歴史学において近現代、より厳密に言えば1789年以降の教育史が研究対象となるのは1960年代以降である。この頃には前述のように思想潮流の変化があったわけだが、教育界についても学校や教育制度が持つ権威性が

議論の俎上に上がり、社会学からの厳しい批判がおこなわれた<sup>15)</sup>。フランスの教育史においては、「フェリー神話」「フェリーの学校神話」ともいうべき、第三共和政初期におけるジュール・フェリーによる教育改革を進歩史観的に捉えることへの批判が起り、フェリー改革の相対化がおこなわれた。ただし、その動きは同時に教育史の革新や広がりにもつながったように思われる。

特に学校衛生と関わる論点は、「学校の医療化」である。「学校の医療化」とは時代を経るにつれて学校には行政や医学関係者をはじめとして様々な専門家が介入し、教育内容ばかりでなく学校教育そのものが医療的なものとなる過程を指す。ベトリナによる整理によれば、「学校の医療化」とは、単に学校に対する医学関係者の覇権の確立なのではなく、各アクター（用務員、看護師、小児科医、病理学者、薬剤師、心理学者、精神科医、ソーシャルワーカー、教師など）の相互関係や実践が複雑に重なって偶発的に展開したものである。ベトリナは、1890年代から1900年代初めの期間における教育的衛生の多様化として医療化を捉える<sup>16)</sup>。

寺崎弘昭による共同研究、およびそれを基にした論考では、学校教育の全面的「衛生化」が「精神衛生化」＝「心理学化」と捉えられている<sup>17)</sup>。寺崎らによる共同研究は、1904年から13年に4回にわたって開催された学校衛生国際会議の記録を分析しながら、学校衛生概念の展開を跡づけ、第4回会議において教育の「精神衛生化」を見出す。この点については、たしかに学校衛生に精神衛生が浸透し、国際会議で重要な議題となったことは間違いのないとしても、あくまでも精神衛生は学校衛生の多様化の一部とみなすべきではないか。したがって、「転回」と捉えることについては疑問が残る。

フランスに関しては、パレイレが18世紀から19世紀末にいたる「医療化」と学校衛生のつながりを概観している<sup>18)</sup>。パレイレは、ピエール・グベールを参照しながら、「医療化」は18世紀後半に根があり、今日まで続くプロセスであるとしたうえで、しかしそれが学校に浸透するまでには時間がかかったとする。契機となるのは、1847年に初めて大臣が医学アカデミーの学校への介入を要請したことであり、これにより児童・生徒の健康に関心が持たれるようになる。続く第二帝政期の公教育大臣デュリュイの下で初めて公文書に「学校衛生」の語が登場したこと、そしてこのときには近視が問題とされたことが指摘される。初等学校については1880年代によく学校衛生が課題として扱われるようになり、ワクチン接種を施す場、伝染病を予防または検知する場、そして反アルコール教育を行う場となる。こうして、「学校は人々の医療化を担うセクターの一つとなる」のである<sup>19)</sup>。

「学校の医療化」を問題とする場合、交差する二つの方向からのアプローチがありうる。すなわち、医療の歴史と教育の歴史である。ヌリッソンによる編著は、医療の社会史と身体教育史を関連づける試みであり、健康の概念がいかに作られ（第1部）、メディアによっていかに広まり（第2部）、学校教育（身体教育、水泳、性教育、反アルコール教育）にいたるか（第3部）という構成となっている<sup>20)</sup>。ただし、個々の論考のページ数も少なく概観

にとどまっている。視角としては編者のヌリッソンがまとめているように、「健康はダイナミックな現実、漸進的で攻撃的なプロセスとして現れてくる」<sup>21)</sup>、すなわち学校に健康あるいは衛生という概念が導入されるなかで、子どもたち・家庭の持つ価値観や行動様式をいかに変えていったのかという見方を取っている。一方向的な医療化の進展という点では、先例として挙げたヴィガレロと近いスタンスであるといえよう。

また、すでに言及したブルドゥレとフォールの論文集にギョームの研究がある<sup>22)</sup>。ギョームは、学校衛生には 1880 年代より「学校の衛生（学校を衛生的な場所とすること）」と「学校による衛生」という二つの側面があることを示し、世紀転換期の反結核運動を経て最終的に学校は予防の場となってそれに成功したとしている<sup>23)</sup>。しかし、政策に関わった数人の医師の学校衛生に関する言説分析と大まかな制度に言及するのみにとどまっており、学校衛生のための具体的な制度や取りくみに関する分析がないまま、目的のための物質的手段と人員が不十分だったという結論は性急すぎよう。

日本では井本青子の衛生教育に関する論文が注目される<sup>24)</sup>。井本は第三共和政前期について、まず 1880 年代に制定された学校建築基準、学校衛生委員会、学校医療視察制度〔——井本は学校医学視察官制度と訳す〕といった制度的な枠組みの概要を示す。学校の衛生基準が明文化され、児童の健康管理が課題となり、衛生教育が道徳教育として位置づけられた。この過程で学校視察医師〔——井本は学校医と訳す〕の役割が増大する。そして、子どもに衛生的な規範を教えることによって家庭全体の教育を図り、為政者側が衛生面の規範の内面化を目指したことを指摘している。こうして、衛生的な校舎を提供し、衛生的な規範を示すことはできたものの、子どもに「清潔にすること」を浸透させることは 1940 年代までできなかったと結論付ける。井本は、子どもや家族による衛生教育・衛生的な規範の受容にも踏みこもうとしているが、この問題は課題として残されている。家族や子どもの社会史の観点からは、彼らが学校教育をいかに受けとめたかについて関心をもたれるが、この問いに対する説得的な解答は、視点を学校教育に置いている場合には容易ではなかろう。全国レベルではなくコミュニケーションレベルに焦点を合わせたうえで、次の章で見るように、学校をさまざまな社会サービスの提供の場として捉え、学校と家庭の日常的な関係を捉える必要があるのではないと思われる。

さて、学校の「医療化」について指摘されたように、児童の健康の前提として学校施設が衛生的であることが求められた。そもそも教室が 40 人から 50 人のサイズに分割され、中庭が配置され、トイレが設置され、学校という施設として独立するようになるのは、第三共和政期になってからだった。現在われわれが知っているような教室、すなわち教員の住居から区別されていて、窓を設けて明るさと通気を保った教室は、第三共和政期を通じて確立していく形態なのである。それ以前の学校の様子はおおむね次のようなものだった。「子ども時代の学校は借家の中にあり、暖房はよく効かず、日当りは悪かったのです。衛生基準の間

題はまだありませんでした。たいてい便所は学校から遠くにありましたけれども、まったくないこともありました。教室の暖房を確保するために、毎週たくさんの薪を古いストーブにくべなければなりません」<sup>25)</sup>。1872年にフランス南部のオード県で生まれたA. B.という人物による回想である。この人物が初等学校に通っている頃に学校建築基準が出され、学校空間が全国で規格化されていくのである。

だが、教育史の観点から学校施設そのものを分析対象とした研究は多くなく、学校空間は長いあいだ教育史で問題とされてこなかった。おそらくは、1970年代のヴィガレロの身体史研究が先鞭をつけたのであろう。ヴィガレロは、学校空間と机やいすなどの備品、子どもの姿勢を取りあげ、そこに身体の矯正の意図を読み取り、身体が個人化・計測化されるばかりか、教育的言説が「学校空間―備品―身体」に標準化＝規範化を志向していることを摘出したのである<sup>26)</sup>。これを受けて、学校空間への教育的意図や衛生的意図、またそれに基づき成立した学校空間に関する分析が、1980年代からはじまっている<sup>27)</sup>。1993年に出されたシャトレの編著は、パリに限定されてはいるものの、初等のみならず中等教育機関も対象とし、教授法の変化にともなう学校施設の変化、さらに学校で使われる机などの備品などにも考察を広げている。しかし、学校建築基準や、それに基づいて作成される学校プランに対し、ヴィガレロのように規律化の意図を読みこむことには否定的である<sup>28)</sup>。

### 3. 福祉史の観点

学校衛生を分析する際の視角として、公衆衛生史と教育史のほかに福祉史の観点がありうる。この観点を導入することで、学校と地方行政や民間団体との関係のみならず、学校と家庭の関係に対する認識を深化させることができるのではないと思われる。ここで福祉史の先行研究を網羅的にまとめる余裕はないので、特にフランスの学校衛生史にとって重要な論点を整理しておきたい。

まず、第二次世界大戦以前の国家について、それが福祉国家とどのような関係にあるのか、また衛生はいかなる地位を占めたのかについてである。例えばノルドは、第一次世界大戦までの第三共和政前期を対象とした、フランスの福祉国家の起源を概観する論文において、共和主義的で家族中心主義的なフランスの福祉国家の土台が築かれたと見る<sup>29)</sup>。これに対して、近代の国家と社会の関係を論じるロザンヴァロンは、公衆衛生が国家と社会の関係を大きく変え、国家の活動領域を拡大させ、介入をためらわなくなったことを指摘する。こうして成立する「衛生国家」は「社会」と呼びならわす領域において発達した。しかし、ロザンヴァロンは衛生国家と福祉国家は異なるものであることを強調する。すなわち、彼によれば、福祉国家は個人に対する社会の義務や連帯のかたちを決める再分配の規範や正義の原則の上に成り立つが、衛生国家は衛生を基軸として「社会的なるもの (le social)」を制度化・機能

させたが、個人を保護せず、権利の拡張や民主化の進展とは結び付いていないとする<sup>30)</sup>。このように、第二次世界大戦以前の国家と戦後の福祉国家の連続性を否定するロザンヴァロンにおいても、衛生が核となって国家と社会の関係が変わったことを述べるのである。

ここで注意すべきは、地方行政史の研究が明らかにしてきたように、この時期のフランスにおいて公衆衛生に加え公的扶助の担い手もまた国家ではなくコミューンであったことである。したがって、国家のレベルのみに焦点を合わせても公権力の福祉に対する向き合い方は見えてこない。ポレは、1890年代以降、保健・衛生について公的介入の役割を担ったコミューンの衛生事務所 (bureau municipal d'hygiène) に着目しつつ、公的扶助におけるコミューンのイニシアティブを明らかにした。1893年に成立した無償医療補助制度についてもコミューンの担う部分や財政負担が大きいことが一例として挙げられる<sup>31)</sup>。

福祉事業の担い手としてのコミューンへの着目は、ローカルな場における民間事業との関係に向かう。この背景にあったのは、主に英語圏で発展した「福祉の複合体」論の影響である。以下、田中拓道による貧困史・福祉史の整理を参考にごく簡単にまとめてみたい<sup>32)</sup>。フーコーの影響を受けた貧困史・福祉史では、貧民や下層労働者の生活環境やモラルを改善するための知や働きかけといった個々の権力実践が、規律権力や「生権力」の全面的な拡散というやや単純な歴史像に回収されがちだった。そこで、1980年代における福祉国家再編を背景として、民間の福祉実践の役割を再評価することに関心が向けられたのが1990年代だった。特にイギリスにおいて、公的制度と民間の救貧実践の組み合わせを具体的に解明しようとする研究が進展、その後フランスをふくむ各国で民間福祉を対象とする研究が現れた。「福祉の複合体」史は18～19世紀以降の民間福祉の役割を再評価し、これらと公的制度を組み合わせることで、福祉の全体像を示すことに貢献した。こうした潮流を受け、岡部造史はフランスの児童保護について特に著書の第7章で、児童保護の具体的な展開において民間事業とそれを支える地域社会に積極的な役割を見出す。そして、結論においては、子どもの健康や衛生、道徳性といった問題がより重視されるようになるにつれて、「地域住民の自発性にも依拠するような統治権力の私的領域への介入が次第になされるようになった」<sup>33)</sup>としている。こうして、統治権力の試行錯誤、および地域住民や現場担当者との妥協やせめぎあいの結果として統治権力が拡大・精緻化されたのである。この見方は、ブルドゥレとフォールによる論文集が医療化を「交渉された医療化」と捉えたことにも重なっている。

ところで、これまでの福祉史では公的扶助や社会保険が主な研究対象となっており、広い意味で福祉に含まれる公衆衛生については研究が手薄のように思われる。この点について、プロディエ＝ドリノは貧困と不衛生の相互関連に留意しつつ、社会事業の展開を跡付けている<sup>34)</sup>。特にリヨンの衛生事務所に着目しながら、社会事業はまず共和派のコミューン、次いで国家の順で展開したこと、そして国家の介入の不十分さと裏腹にローカルの事業が不可欠であったことを主張している。また、発表はプロディエ＝ドリノよりも先になるが、ブル

ドゥレは同じく衛生事務所を取り上げ、福祉事業をコミューンが負担することにより公的扶助の「医療化」が伴ったとしている<sup>35)</sup>。なかでも、衛生事務所の主要な関心が子どもと学校にあったこと、そして人々の衛生教育は子どもと教育を介して試みられたことは本稿の関心にかかわるものである。このような医療と福祉の接続については、クーターによる編著が多様な観点から試みている<sup>36)</sup>。クーターは序文で、1880年には子どもの健康と福祉はまだ「医療化」されていなかったが、それらは1920年代までに「医療化」されただけでなく、医療・福祉全般における国家の役割を拡大するための強力な論拠となったとしている<sup>37)</sup>。このように、衛生と貧困は密接にかかわっていたこと、公的扶助をコミューンが担うことで「医療化」が進んだこと、その担い手たるコミューンの衛生事務所は子どもと学校に関心を向けていたことが明らかにされている。

では、このなかで学校はいかなる役割を果たしていたのか。学校は教育の場であるばかりではないことは先にみたとおりだが、社会において学校が持つ意味を貧困や衛生（子どもの健康）、すなわち福祉の点からより積極的にとらえる必要があるのではないか。こうした観念に立つとき、一つのヒントとなるのが、近年の日本において教育と福祉との関係を考察した教育社会史からの指摘である。『叢書・比較教育社会史 福祉国家と教育』の編者の一人である岩下誠は各論考と討議を受けて以下のように述べている。『『学童としての子ども期』が創出されたことによって、学校教育が、子どもを一定期間労働市場に依拠せず生存させる、強力な脱商品化機能を果たしたことは明らかである。同時に、あらゆる子どもを包摂すべく組織化された学校は、学校給食や健康診断といった福祉・医療サービスの拠点としても機能した。〔略—筆者〕教育と福祉が相互促進的に機能することがありうるということ、さらに教育の論理から福祉供給構造の変化や再編の動きが起こりうるということ』<sup>38)</sup>が注目されてよいとする。再生産論的観点からすれば、教育は社会の格差を温存し強化する働きを持つといえるが、学校が教育内容に加えて社会的なサービスの供給拠点となる時期以降について、岩下の指摘は的を射たものであると思われる。

学校が提供する福祉・医療サービスとして、先の引用でも挙げられた学校給食や健康診断のほかに、ここでは林間学校研究を挙げたい。「林間学校」とは、ひとまず便宜的に名称を用いているのだが、フランス語の「colonie de vacances（コロニー・ド・ヴァカンス）」のことである。訳語の問題として、ドイツ語やフランス語と日本語ではねじれが生じている。まず、スイスで始まった「Ferienkolonie」がフランスに入ると「colonie de vacances」と呼ばれ、これが日本に入ると「休暇聚落」や「休暇移住」などと翻訳された。当初は、貧しく貧弱な子どもを対象に、長期休暇のあいだ、都会からはなれた自然環境、衛生的環境のもとで健康を増進するために行われた活動であった。そして、これと似たもう一つの活動がドイツで始まった「Waldschule」であり、これは虚弱児を集めて健康増進を図る、自然ゆたかな都市郊外に設置された常設の学校であった。つまり、長期休暇など一時的な活動が常設の

学校かという違いが存在する。後者がフランスで「*école de plein air*」と呼ばれ、日本で紹介されると「森林学校」あるいは「林間学校」という訳語があてられた。日本で初めての「*Waldschule*／*école de plein air*」に相当する学校は 1917 年開校の白十字会林間学校（神奈川県）である。しかしながら、日本では、内容が季節限定の「*Ferienkolonie*／*colonie de vacances*」を表す語として「林間学校」が定着することとなった<sup>39)</sup>。対して、「*Waldschule*／*école de plein air*」は、戦後より「健康学園」と呼ばれ現在にいたっている<sup>40)</sup>。本稿では、「*Ferienkolonie*／*colonie de vacances*」を「林間学校」、「*Waldschule*／*école de plein air*」を「野外学校」と訳して用いることとする。紙幅の関係もあり、以下では林間学校のみについて検討したい<sup>41)</sup>。

林間学校活動は、コミュニオン、民間団体、宗教団体など多様な主体により実施された。19 世紀末に貧しく虚弱な子どもを対象として体力増進、衛生的で規律正しい生活習慣の獲得を目指して開始された<sup>42)</sup>。20 世紀初頭からは、中間層への拡大と参加人数の大規模化が見られ、これに伴って教育的な意図が拡大する。1960 年頃には、毎年 100 万人を超える子どもたち（同年代の 12.3% ほど）が参加するまで発展する。

林間学校活動についてはレイ＝エルムが先駆的な研究を行っている<sup>43)</sup>。彼は、雑誌や団体のパンフレットなど刊行史料を中心として、全国組織結成の動きや林間学校の運営主体を分析した。現在も基盤となる浩瀚な研究であるが、地方行政や教育行政との関係については考察が不十分である。その後、林間学校の研究は長らく進められていなかったが、2002 年に英語で出版されたダウズの研究が新たな局面を切り開いた<sup>44)</sup>。ダウズは、バリ郊外の複数のコミュニオンによる活動を検討し、当局の主体性を強調している。その際、社会主義市政にとっては当局による社会サービスの一環として、また共産主義市政においては政治教育の場として活動が行われたことを示すなど、コミュニオンごとの活動内容の違いにも目を配っている。そのうえで、いずれのコミュニオンにとっても林間学校は、書名のとおりに「約束された土地」、すなわち公衆衛生と大衆教育のフロンティアとして位置づけられた。また、2009 年に出版された同書のフランス語版は、基本的に英語版の翻訳となっているものの、新たに序文と 1 章分が追加され、各所に加筆修正がなされている<sup>45)</sup>。特にフランス語版では福祉国家形成過程がより強く意識され、「福祉コミュニオン」(*municipalités-providence*) の可能性が示唆されている。英語版から 7 年がたち、「福祉の複合体」の議論を受けてコミュニオンによる福祉事業として林間学校を捉える再解釈がなされているのである。なお、日本では、上垣豊が若者活動に関連するものとして著書の 1 章を割いて林間学校活動を取りあげている<sup>46)</sup>。ペダゴジー（教育に関する実際的な知識や実践的な方法）に着目しつつ、カトリック系と非カトリック系の活動を分けて捉え、林間学校活動が人民戦線期において国家機構に組み込まれていくまでを扱う概観となっている。学校衛生との関連については、河合務の論考がある<sup>47)</sup>。河合は、19 世紀末から 20 世紀初頭に林間学校活動が学校衛生に組み込まれた

とするが、分析の対象は主に学校衛生を主題とした数人の著作に限られている。学校衛生の担い手たるコミュニケーションレベルでの分析が不可欠であろう。

長期休暇中に子どもたちを自然へ連れだす林間学校活動は、プロテスタントの牧師やカトリック系の神学校、社会主義あるいは共産主義のコミュニケーション議員など、民間によっても慈善活動としてなされた。ダウズによれば、こうした活動において、カトリック、プロテスタント、共和派、コミュニストがそれぞれ子どもをめぐって競合することになった。そのなかで公立の初等学校を通じた林間学校活動は、社会的な支援と公教育とが合流した地点に立つことで、より広い社会事業のネットワークに位置していた<sup>48)</sup>。つまり、それは個別の慈善ではなく、活動を主導する都市とそれを受け入れる地方が運動し、全国に張りめぐらされた学校網と公教育省による統轄のもとでおこなわれた。

コミュニケーションを軸にすえたダウズの主張は説得的ではあるが、林間学校活動を学校衛生の側からも捉えることで福祉事業としての側面を深められるのではないかと思われる。この点は稿をあらためる必要があるが、最後にリヨンにおける林間学校活動を例として展望を示しておきたい<sup>49)</sup>。

リヨン当局による林間学校活動には、学校基金を通じてリヨン当局が運営する活動と、民間の各種団体への支援の二種があった（1922年時点）。リヨン当局による活動で中心的な役割を担った学校基金（Caisses des écoles）とは、フェルディナン・ビュイツソンが編纂した『教育学辞典』（1911年）では、「学校基金とは、勤勉な児童に対して認められた報奨や貧しい児童に与えられる援助によって通学を奨励し促すためのものである」と定義されている<sup>50)</sup>。学校基金は1867年に貧困層の通学を金銭的・物質的に援助するために創設され、1900年には公教育省通達により林間学校活動の組織・運営が加わった。1907年にコミュニケーションに設置が義務化されたことで、学校基金は学校行政付属の機関・コミュニケーションの行政機関へと変化したのである<sup>51)</sup>。ちなみに、リヨンでは1898年に設立されている。学校基金は貧困層への通学支援を行うコミュニケーションの機関として貧しい家庭の状況を把握していたため、参加児童を選別できたのではないかと思われる。そして、民間の林間学校活動への支援においても衛生事務所・学校基金が関わっていたことから、リヨン当局による林間学校活動は、1920年代の時点でも貧しく不健康な子どもを優先していたのではないだろうか。レイ＝エルムが林間学校諸団体の動機の多様性を結論づけているのに対し<sup>52)</sup>、ダウズは世紀転換期になると林間学校活動は教育が中心になっていったと主張する<sup>53)</sup>。しかし、リヨンの例を踏まえるならば、世紀転換期以降も衛生や貧困層への扶助といった側面が一部で生き続けていたのではないかと思われる。

## おわりに

初めに述べたように、これまで学校衛生は学校衛生史という枠組みでの十分な検討がなされてこなかった。このため本稿では、フランス第三共和政期を中心として、公衆衛生史、教育史、福祉史のそれぞれにおいて学校衛生がいかに捉えられているかを考察した。各々の研究領域での成果を踏まえれば、学校衛生史研究の土台は整っているといえよう。では、学校衛生史研究は、どのような可能性を持ちえるだろうか。

公衆衛生史では、私的所有への介入をめぐるコミュニケーション当局の実行力が課題とされてきたため、学校衛生のような私的所有の壁に阻まれない対象については等閑視されがちだった。このため学校衛生をめぐる衛生当局の業務を分析することで、公衆衛生行政が果たした役割について再評価が行われるべきだろう。その際、規律化や社会的統制といった側面だけでなく、「交渉された医療化」すなわち為政者や専門家と社会——学校衛生においては子どもや家庭——の間の相互作用という捉え方が有効だろう。

そして、このスタンスは、教育史における「学校の医療化」が各アクターの相互関係や実践が複雑に重なって偶発的に展開したという見方とも重なるものである。このように考えると、行政および専門家の言説や学校教育内容ばかりを議論の俎上に載せていては、学校と家庭および子どもとの関係は見えてこない。医療と教育の交差する学校衛生とは、同時に貧困への対応でもあり、福祉との関係と合わせて検討されるべきであろう。

フランスの場合、公的扶助は公衆衛生と同じく主要な担い手がコミュニケーションであった。衛生と貧困は密接であったために公的扶助の「医療化」が進み、とりわけ子どもと学校に関心が向けられていた。したがって、学校を単に教育を提供する場としてだけでなく、福祉・医療サービスの供給拠点としても見なすことが重要となる。その接点となるのは学校が提供する林間学校活動、学校給食や健康診断（学校医療視察制度）などである。当局にあたる学校基金や衛生事務所の関与と合わせ、このような学校のサービス提供機能の分析を介してはじめて、学校が家庭や子どもとどのような関係を結んでいたのかが見えてくるのではないか。

本稿は学習院大学人文科学研究所若手研究者研究助成の研究成果である。

### 註

- 1) 犬飼崇人 (2017) 「フランス第三共和政期における学校衛生と児童の健康：リヨンを中心として」 学習院大学博士論文。
- 2) 西川長夫 (2011) 『パリ五月革命私論：転換点としての 68 年』 平凡社新書, pp.434-441.
- 3) イリッチ, イヴァン (1979) 『脱病院化社会：医療の限界』 金子嗣郎訳, 晶文社 (Ivan ILLICH,

- Limits to Medicine: Medical nemesis, the expropriation of health*, Boyers, 1976).
- 4) フーコー, ミシェル (1977) 『監獄の誕生：監視と処罰』 田村俣訳, 新潮社, pp.144-145. (Michel FOUCAULT, *Surveiller et punir : naissance de la prison*, Gallimard, 1975).
  - 5) 代表的なものとして、コルバン, アラン (1990) 『においの歴史：嗅覚と社会的想像力』 山田登世子, 鹿島茂訳, 藤原書店. (Alain CORBIN, *Le miasme et la jonquille : l'odorat et l'imaginaire social XVIII<sup>e</sup>-XIX<sup>e</sup> siècles*, Aubier Montaigne, 1982)、クセルゴン, ジュリア (1992) 『自由・平等・清潔：入浴の社会史』 鹿島茂訳, 河出書房新社. (Julia CSERGO, *Liberté, égalité, propreté : la morale de l'hygiène au XIX<sup>e</sup> siècle*, Albin Michel, 1988) など。
  - 6) ヴィガレロ, ジョルジュ (1994) 『清潔 (きれい) になる (私) : 身体管理の文化誌』 見市雅俊監訳, 同文館, pp.4-6. (Georges VIGARELLO, *Les propre et le sale : l'hygiène du corps depuis le Moyen Âge*, Éditions du Seuil, 1985).
  - 7) Ibid., p.263-277.
  - 8) MURARD Lion, ZYBERMAN Patrick (1996), *L'hygiène dans la République : La santé publique en France, ou l'utopie contrariée 1870-1918*, Fayard.
  - 9) DUMONS Bruno, POLLET Gilles (1998), « Élités administratives et expertise municipale : Les directeurs du Bureau d'Hygiène de Lyon sous la Troisième République », Martine KALUSZYNSKI, Sophie WAHNICH, dir., *L'État contre la politique : Les expressions historiques de l'étatisation*, L'Harmattan, pp.37-54.
  - 10) JOANA Jean (1998), « L'action publique municipale sous la III<sup>e</sup> République (1884-1939) : Bilan et perspectives de recherches », *Politix*, 11-42, pp.151-178.
  - 11) BOURDELAIS Patrice, FIJALKOW Yankel (2004), "French Cities and the Origins of Medical and Social Policy: Late 19<sup>th</sup> - 20<sup>th</sup> Century France," Laurinda ABREU, ed., *European Health and Social Policies*, Bruno, Mazaryk University/ European Compostela Group of Universities, p.367, p.372.
  - 12) 大森弘喜 (2014) 『フランス公衆衛生史：19世紀バリの疫病と住環境』 学術出版会.
  - 13) BOURDELAIS Patrice, FAURE Olivier (2005), *Les nouvelles pratiques de santé : acteurs, objets, logiques sociales (XVIII<sup>e</sup>-XX<sup>e</sup> siècles)*, Belin.
  - 14) シュヴァリエ, ルイ (1993) 『労働階級と危険な階級：19世紀前半のパリ』 喜安朗, 木下賢一, 相良匡俊訳, みすず書房. (Louis CHEVALIER, *Classes laborieuses et classes dangereuses à Paris pendant la première moitié du XIX<sup>e</sup> siècle*, Plon, 1958).
  - 15) イリッチ, イヴァン (1977) 『脱学校の社会』 東洋, 小澤周三訳, 東京創元社. (Ivan ILLICH, *The Deschooling Society*, Harper & Row 1970.)、ブルデュー, ピエール、パスロン, ジャン＝クロード (1991) 『再生産：教育・社会・文化』 宮島喬訳, 藤原書店. (Pierre BOURDIEU, Jean-Claude PASSERON, *La reproduction : éléments pour une théorie du système d'enseignement*, Éditions de Minuit, 1970.) など。
  - 16) PETRINA Stephen (2006), "The Medicalization of Education: A Historiographic Synthesis," *History of Education Quarterly*, 46, pp.503-531.
  - 17) 寺崎弘昭 (2015) 「学校衛生国際会議の展開と転回 1904～1913(1)：現代教育錬成の垣塙」『山梨大学教育人間科学部紀要』 17, pp.285-295. および「学校衛生国際会議の展開と転回 1904～1913(2)：学校教育の『精神衛生 (mental hygiene)』化」『山梨大学教育人間科学部紀要』 17, pp.287-308. なお、フランスについては連携協力者に名を連ねる河合務 (2018) 「学校衛生と子ども

- も観：20 世紀初頭フランスにおける子どもの疲労問題と『知的衛生』『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』14-2, pp.167-177.
- 18) PARAYRE Séverine (2011), « De l'hygiène à l'hygiène scolaire : les voies de la prévention à l'école (XVIII<sup>e</sup> - XIX<sup>e</sup> siècles) », *Carrefours de l'éducation*, 32, pp.49-63.
- 19) Ibid, p.63.
- 20) NOURRISSON Didier, dir. (2002), *Éducation à la santé, XIX<sup>e</sup> - XX<sup>e</sup> siècle*, Éditions de l'école nationale de la santé publique.
- 21) Ibid., p.7.
- 22) GUILLAUME Pierre (2005), « L'hygiène à l'école et par l'école », BOURDELAIS, FAURE, op. cit., pp.213-226.
- 23) 表現は多少異なるが、梅原秀元も、ドイツの公衆衛生のアプローチの変化を背景として、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、公衆衛生への「学校の衛生」の確立から「生徒の衛生」へと展開したことを指摘している。梅原秀元（2015）「健康な子どもと健康な学校：19 世紀から 20 世紀初頭におけるドイツの学校衛生の歴史研究をめぐって」『三田学会雑誌』108-1, pp.71-95.
- 24) 井本青子（2004）「フランス第三共和政前期初等公教育における衛生教育」『史艸』45, pp.26-48.
- 25) OZOUF Jacques (1973), *Nous les maître d'école : autobiographies d'instituteurs de la Belle Époque*, Gallimard, p.110. これは、教員が自らの過去について語った記録を集めた資料集である。
- 26) VIGARELLO, op.cit.
- 27) TOULIER Bernard (1982), « L'Architecture scolaire au XIX<sup>e</sup> siècle : De l'usage des modèles pour l'édification des écoles primaires », *Histoire de l'éducation*, 17, pp.1-29.
- 28) CHÂTELET Anne-Marie (1993), *Paris à l'école*, Pavillon de l'Arsenal. および、CHÂTELET Anne-Marie (1999), *La naissance de l'architecture scolaire : Les écoles élémentaires parisiennes de 1870 à 1914*, Édition Champion. なお、学校の備品については PEYRANNE Josette (1999), *Le mobilier scolaire du XIX<sup>e</sup> siècle à nos jours*, Atelier National de Reproduction des Thèse.
- 29) NORD Philip (1994), "The Welfare State in France, 1870-1914," *French Historical Studies*, 18-3, pp.821-838.
- 30) ROZANVALLON Pierre (1990), *L'État en France de 1789 à nos jours*, Seuil, pp.128-135.
- 31) POLLET Gilles (1995), « La construction de l'État social à la française : entre local et national (XIX<sup>e</sup> et XX<sup>e</sup> siècles) », *Lien social et Politiques*, 33, pp.115-131.
- 32) 田中拓道（2011）「ヨーロッパ貧困史・福祉史研究の方法と課題」『歴史学研究』887, pp.1-9, 29.
- 33) 岡部造史（2017）『フランス第三共和政期の子どもと社会：統治権力としての児童保護』昭和堂, p.244.
- 34) BRODIEZ-DOLINO Axelle (2013), « Entre social et sanitaire : Les politiques de lutte contre la pauvreté - précarité en France au XIX<sup>e</sup> siècle », *Le Mouvement Social*, 242, pp.9-29.
- 35) BOURDELAIS (2005), « Les bureaux d'hygiène municipaux (1879-1900) : Connaître, décider, innover, assister, convaincre et diffuser », BOURDELAIS, FAURE, op. cit., pp.267-284.
- 36) COOTER Roger, ed. (1992), *In the Name of the Child: Health and Welfare, 1880-1940*, Routledge.
- 37) Ibid., p.12
- 38) 岩下誠（2013）「新自由主義時代の教育社会史のあり方を考える」広田照幸, 橋本伸也, 岩下誠編『叢書・比較教育社会史 福祉国家と教育：比較教育社会史の新たな展開に向けて』昭和堂,

- pp.310-311.
- 39) 訳語については、加藤理 (2010) 「大正時代・昭和初期の林間学校・臨海学校：仙台児童文化活動の諸相 (11)」『論叢児童文化』41, pp.10-11 を参照。白十字会林間学校については、桐山直人 (1999) 『茅ヶ崎の小さな学校：旧白十字会林間学校の三二年』草土文化。
- 40) 健康学園については、前田武彦 (2000) 『子どもが変身する学校：消えてゆく健康学園』雲母書房、および森田友恵・池本喜代正 (2014) 「東京都の区立健康学園の廃園に関する一考察」『宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要』37, pp.191-198.
- 41) 野外学校に関しては、CHÂTELET Anne-Marie et al., dir. (2003), *L'école de plein air : Une expérience pédagogique et architecturale dans l'Europe du XX<sup>e</sup> siècle*, Recherches. や VILLARET Sylvain, SAINT-MARTIN Jean-Philippe (2004), « Écoles de plein air et naturisme : une innovation en milieu scolaire (1887-1935), *Mouvement & Sport Sciences*, 51, pp.11-28. がある。
- 42) 第三共和政初期の活動と教育行政の関係については、犬飼崇人 (2007) 「フランス第三共和政初期における林間学校：衛生と健康の教育をめぐる」『学習院史学』45, pp.76-93.
- 43) REY-HERME P.-A. (1961), *Les Colonies de vacances en France 1906-1936*, 3 vol., Fleurus.
- 44) DOWNS Laura Lee (2002), *Childhood in the Promised Land: Working-class Movements and the Colonies de vacances in France, 1880-1960*, Duke University Press.
- 45) DOWNS Laura Lee (2009), *Histoires des colonies de vacances*, Perrin.
- 46) 上垣豊 (2016) 「スカウト運動とコロニー・ド・ヴァカンス」『規律と教養のフランス近代：教育史から読み直す』ミネルヴァ書房
- 47) 河合務 (2020) 「フランスの学校衛生とコロニー・ド・ヴァカンス：19～20世紀転換期における教育と転地療法」『地域学論集 (鳥取大学地域学部紀要)』17-2, pp.73-80.
- 48) DOWNS (2002), op. cit., pp.4-5.
- 49) 以下の内容は、犬飼 (2017), op. cit., pp.125-128, 150-152. によっている。
- 50) BUISSON Ferdinand, dir. (1911), *Nouveau dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire*, Paris, Hachette. « Caisses des écoles ». (<http://www.inrp.fr/edition-electronique/lodel/dictionnaire-ferdinand-buisson/document.php?id=2241>) 2023年9月27日アクセス.
- 51) 梅澤取 (1989) 「19世紀フランス初等教育財政と学校金庫 (Caisse des Écoles)」『東京大学教育学部紀要』28, pp.353-362.
- 52) REY-HERME, op. cit., pp.369-372.
- 53) DOWNS (2002), op. cit., pp.46-47.

## ENGLISH SUMMARY

### Possibilities for Research on the History of School Hygiene

#### —With a Focus on Elementary Education during the French Third Republic

INUKAI Takahito

Studies on school hygiene have been limited to overviews that lack systematic discourse analysis and examination of specific systems and practices. In this study, we review studies related to school hygiene from the perspective of the history of public health, education, and welfare, with a focus on primary education during the French Third Republic, and survey the potential of studies on the history of school hygiene.

Although the history of public health focuses on interventions in private ownership, scant attention has been paid to school hygiene. Therefore, the role of public health administration needs to be re-evaluated by analyzing the work of health authorities regarding school hygiene. Attention should be paid to discipline and social control as well as to the interaction between government or professionals, and society.

As the intersection of healthcare and education, analysis of school hygiene should also consider its association with poverty. In France, the commune was primarily responsible for public assistance and public health, with a strong medical interest in schools and children. Therefore, schools should be considered not only as educational institutions but also as centers for welfare and medical services.

*Key Words:* school hygiene, public health history, education history, welfare history, France